

吉備国際大学
社会福祉学部研究紀要
第19号, 1 - 9, 2009

越原春子と女子教育－女性観の形成とその教育観－

田中 卓也^{※1}

KOSHIHARA HARUKO's women's education Ideas and Practices

— The point of view education and women's life style —

Takuya TANAKA

Abstract

This Paper is aim to clearly the formation of KOSHIHARA's Women's Ideas and the point of view women's education. KOSHIHARA was independency for vocational lives of many women and continued to appeal for the women's liberation for many years. She was on the founder and head mistress as the honor of NAGOYA women's high school. It was aim to character building and full development of personality and trained many working woman. Therefore she made to effort to raise the status of women and many non-public education in AICHI prefecture.

Key words : women's (girl's) education, women's suffrage, women' movement,
dormitory education, NAGOYA women's university

キーワード : 女子教育、婦人参政権、婦人運動、寄宿舎教育、名古屋女子大学

I. はじめに

本論文では、「私立名古屋女学校」（のちの名古屋高等女学校。現在の名古屋女子大学の前身）の創設に尽力し、同校校長に就任した越原春子（こしはらはるこ）の人物像と彼女が実践してきた女子教育の内容および性格について考察を加えるものである。

越原春子に関する研究は、これまでは主に人物史（伝記）で取りあげられることが多く、越原の教育内容および実践の研究についてはこれまでのところ見あたらない¹⁾。越原は女子教育者であるが、この教育実践の根底には、わが国の「女子」のあるべき姿を投影したものであった。当時の女性に求められ

ていた「良妻賢母」の考えのみならず、「新しい女性」について長い間関心を持ち続けていた。「新しい女性」に関心を抱くなかで、実践された越原の女子教育を考えることは、意味があるものと考えられる。

越原は女子教育者の顔だけではなく、様々な方面で活躍した人物であった。「名古屋帯」の発明、名古屋最初の「女学生用洋装通学服」の考案、さらには戦後初の衆議院議員総選挙において最初の「女性国会議員」に選出され、日本国憲法や教育基本法の制定に関与するなどの多くの功績を後世に残している²⁾。

越原における女子教育の内容や性格を明らかにす

※1 吉備国際大学社会福祉学部子ども福祉学科
〒716-8508 岡山県高梁市伊賀町8
Department of Child Welfare, School of Social Welfare, KIBI International University
8, Iga-machi, Takahashi-city, Okayama, Japan (716-8508)

ることで、彼女の女性観の一端を伺い知るとともに、教育思想がいかなる影響を受けながら、形成されたのかについて探りたい。

Ⅱ. 女子教育事業への取り組み

1. 教員志望の夢

越原春子は、1885（明治18）年に岐阜県加茂郡越原村において、実父越原弥太郎の長女として誕生した。父の弥太郎は地元の教員志望であったが、祖父は病気を患い、教員の道を断念し、家業の蚕種の商売（日新館）を営んだ。

春子は、地元の越原小学校卒業後、小学校教員をめざし、「岐阜県師範学校教習所」で学び、田舎の加子母村で一時教員生活を送った。しかしながら家庭の事情に伴い退職するも小学校教員の夢を捨てることができなかった春子は、夢の実現のために自学自習に励んだ³⁾。

彼女の夢は潰えたかに見えたが、従兄弟の内木玉枝から突如協力の依頼を受けた。内木は当時、「中京裁縫女学校」（現在の中京女子大学の前身）開校準備で多忙を極めていたが、この要請に越原は腰を上げ、一路内木のいる名古屋に直行した。春子が越原村在住の頃にしたとされる日記『美濃少女』のなかには内木について、「さすがは師範の訓導たる資格十分そなわり、その説を聞くにみな理なりて、そぞろに敬慕の念を生ぜしむ」と尊敬していることを伺わせる一節がある⁴⁾。

越原は、内木の強い薦めもあり、同校高等師範科に入学し、3年間の学生生活を送った。また卒業後は東京府帝国教育会主催家政科講習会で1ヶ月受講し、受講後に中京裁縫女学校教員に採用された。同校に採用後も春子は、内木から教育に関する多くの内容を学んだ。1905（明治38）年には、内木とともに「愛知淑徳女学校」（現在の愛知淑徳大学の前身）にて家政科教員となった。当時の校長（兼教師）は創設者の小林清作であった。小林は同校にて「歴史」・

「地理」・「英語」・「数学」を教えていた。

2. 小林清作・成瀬仁蔵との交友活動

淑徳女学校赴任後の春子は、小林といかにして交友を広めたのか。それを証明する資料は詳細に明らかににはできない。しかしながら、1916（大正5）年11月ごろには、春子と小林さらには橋本越南、森田資考、瀬木せつ子ら地元有志家を中心とした「婦人問題研究会」が結成された⁵⁾。同会では「男女の貞操について」、「一夫多妻論」、「婦人の職業問題」、「女子教育問題」、「婦人参政権問題」等のテーマにいたるまで、婦人にまつわる様々な問題について懇話されていた。またこの研究会には女子教育者の成瀬仁蔵も時折参加していたようである。春子がのちに婦人問題に関する講演を精力的に繰り広げたことと関係しているのかもしれない。では小林はどのような教育思想を持ち得た人物であったのか。小林が創設した「愛知淑徳女学校」の規則を見ることで、彼の女子教育思想をうかがうことにしたい⁶⁾。

愛知淑徳女学校規則

第一条 本校は日本主義を以て淑徳を涵養し兼て女子に須要なる高等普通教育を施すを以て目的と為す

「本校は日本主義を以て淑徳を涵養し」とあるように、「日本主義」を大きな柱としたうえで、「淑徳」の心をもった女子学生を養成したようである。同校で刊行された学校誌『淑徳』第1号掲載の「愛知淑徳女学校の教育方針」によると、「日本主義という言葉は、すこぶる広い意味を有する言葉でありまして、その見方によって、いろいろ解釈が生じますが、女子教育において、日本主義と申しますと、要するに、良妻賢母に外ならないのであります」と述べている⁷⁾。小林は、「日本主義＝良妻賢母」と捉えて、淑徳の精神を持った女性を育てようとした。

3. 「私立名古屋女学校」の設立

1914（大正3）年、同校で教員の経歴を重ねた春子は、夫である越原和の協力の要請に応じ、「名古屋女学校」を創設した。なお学則は次のようになっていた⁸⁾。

私立名古屋女学校学則

第一章 総 則

第一条 本校ハ我が国ノ女徳ヲ啓発シ女子ニ必須ナル学術技芸ヲ授ケ以テ日進ノ智識ト実用ノ才トニ富ミ良妻賢母タルヘキモノヲ養成スル所トス

第二条 本校ニ本科、裁縫科、家政科ノ三科ヲ置ク

第三条 各科修業年限、学科課程及教授時数
 本科 三ヶ年 裁縫科 一ヶ年
 家政科 二ヶ年
 本科二ヶ年ノ補習科ヲ置ク

同校は「本科」（修業年限3年）・「裁縫科」（修業年限1年）・「家政科」（修業年限2年）の三科から構成され、女子学生に「学術技芸ヲ授ケ」ながら「良妻賢母タルベキモノ」を養成することになっていた。設立の趣旨では、次のように記されていた⁹⁾。

私立名古屋女学校設立の趣旨

時世の進運に伴ひ女子教育の隆盛に赴き漸時、改善せられつつあるは誠に慶賀の至りなり。元来、女子は家庭にありて諸事の整理は勿論、直接、子女を教養すべき自然の教育家たる最大天職を有するものなれば、女子が相当の学問技芸を習得して常識の発達を計り、品性の陶冶に勉むると否と一家の感化に大なる影響あるは愕然たる事実にして延ひては国家の消長に関する所以なり。然るに今なほ、余りに学理にのみ傾きて、社会の日常生活と乖離し、為めに家庭の婦

人として實際上の智識に疎きは如き、或はまだ技芸にのみ偏して日進の智識と品格の涵養とに違かるが如き結果を生じて、動もすれば虚文虚飾の教育に流れむとするの誤りあるは転た浩嘆た堪へざるところなり。されば本校設立の趣旨の存する所も前述に深く鑑み、畏くも教育勅語、戊申詔書の聖旨を奉体して苟も輕薄にながれず、大に国情と民度とに則り本邦固有の女徳を發揮し、特に普通一般家庭の現状を標準として之に必要な学術技芸を編制統一し、教授は徒に学理にのみ偏せず勉めて實際的なを重じ、以て正しき日進の智識と実用の才に富み、真に良妻たり賢母たるべきものを養成して遺憾なからむことを期するに、十有余年間、聊か女子教育に盡瘁し来たりて斯道の経験と確信とにより普く父兄諸君の鴻志に添はむとするところ蓋し時勢の要求の依つて与さしめたるを疑はざるなり。希は右の趣旨に賛同せられて、更に他の姉妹に語りつたへ来り学び手、智徳を磨かると共に幸いに夜の素志をして空しからざらしめたまはむ事を

校長 越原 和

学監 越原 春子

「女子が相当の学問技芸を習得して、常識の発達を計り、品性の陶冶に勉むると否と一家の感化に大なる影響を与えたるは愕然たる事実」であるとし、女子教育の有用性を主唱している。これを怠れば「延いては国家の消長に関する所以」とまで言及している。越原夫妻は、同校女子学生に「正しき日進の智識と実用の才に富み、誠に良妻たり賢母たるべきものを養成して遺憾なからむことを期する」とし、良妻賢母にもとづいた教育方針を掲げ、実践しようとしたのである。

また春子は、女子の家庭生活の改善についてもいろいろ意見を寄せていた。「家庭生活の改良 日常

の衣食住を簡易にして時間の余裕を作りたい」という地元の新聞「新愛知」誌上の論説において、彼女は次のように話している¹⁰⁾。

私は現存する日本の家庭の生活をもつと簡易にしたいと考えて居ります。実際現在儘では一家の爲めに少くとも一人、若しくはそれ以上の婦人が全力を注いで働かない時は、其の所用を弁ずることが出来ません。それ程度家庭の仕事は煩雑と雑多を極めて居りまして結婚した婦人は通例男子の家隸となるか、さなくば男子の爲めに家庭の管理者となるのでありまして、之を大にしては、婦人は世界中の人類の生活に直接は需要品、即ち全人類の衣食住を悉く一手に掌るものであると云つても何等不可ではない位、日本の家庭は二重三重の生活を営んで居るので御座います。其上に現今では二十の家庭のためには二十人の婦人が一日中働き通して家庭の事務に忙殺されて主婦は日寸暇をも有せず、善良なる料理人であり理想の管理者であり、完全無欠の掃除人であり、賢き購買者であり、この何れをも兼ねると同時に一方善良なる児童の哺育及教育者と云ふ重大な任に当らねばなりません

「家庭の仕事は煩雑と雑多を極めて居」る女性について、春子も憂慮している。将来は「結婚した婦人は通例男子の家隸となるか、さなくば男子の爲めに家庭の管理者となる」ことがほぼ決められていた女性は、男性よりも低い地位にあることとする発言をしている。本来女性は「善良なる料理人であり、理想の管理者であり、完全無欠の掃除人であり、賢き購買者であり」ながらも、「同時に一方善良なる児童の哺育及教育者と云ふ重大な任に当」ることが求められていた。すなわち知識を備えた良妻賢母である女性が求められた。

春子は夫の和と協力しながら、「良妻賢母」の女性の育成に努めた。また当時低地位であった女性の地位の向上を主張し、その実現にむけて一層努力を続けていくことになった。

Ⅲ. 寄宿舎における「親切」心の形成と高等女学校への昇格

1. 女子学生と寄宿舎生活

同校女子学生のなかには自宅から通学する者のほかに、寄宿舎から通学する者も存在した。寄宿舎はどのようになっていたのか。「女学校学則」と同じ頃に作成されたとされる「寄宿舎規則」より伺うことにする¹¹⁾。

寄宿舎規則

- 第一条 寄宿生ハ能ク舎則ヲ守リ舎監ノ指導ニ従フハ勿論互ニ親切ヲモツテ旨トシ何事ニモ共同一致シテ相助ケ極メテ円満ナル家庭的な生活ヲ営ムヘシ
- 第二条 舎生ハ努メテ衛生ニ注意シ且ツ毎日適宜ノ運動ヲナシテ身体ノ健全ヲハカルヘシ
- 第三条 上級生ハ交代ニテ主婦ノ任ニアタリ下級生ヲ指導シテ料理経済家事ノ実習ヲナスヘシ
- 第四条 舎内ニ於テハ専ラ静肅ヲ旨トシ互ニ礼讓ヲ重ンジイヤシクモ他生ノ勉強ヲ妨グルカ如キ行為アルベカラズ
- 第五条 舎生ノ学資金ハ舎監ニ保管ヲ乞ヒ必要ニ応ジ一定ノ出納簿ニ金額ヲ記入シテ舎監ニ行先ヲ届出テ二人以上同行スヘキモノトス
- 第六条 外出ハ日曜日、休日、祝祭日ハ朝食ヨリ点灯時マデトシ、其他ノ日ハ放課後ヨリ点灯時マデトシ、必ズ舎監ニ行先ヲ届出テ二人以上同行スベキモノトス

第七条 舎生ノ携行品ハ夜具、行李、机等トス

第八条 舎生ハ左ノ舎費並ニ食費ヲ毎月七日マ
デニ納付スベシ

舎費 一円 食費 五円三十銭

第九条 金銭其他物品ノ貸借ハ一切嚴禁トス

寄宿する女子学生には「舎則ヲ守リ舎監ノ指導ニ従フハ勿論互ニ親切ヲモツテ旨」とするよう決められていた。当時教員兼舎監を努めていた春子の徹底指導のもとで、女子学生は互いに「親切」心を養うことが求められた。また上級学生らは「交代ニテ主婦ノ任ニアタ」ることで、「下級生ヲ指導シテ料理経済家事ノ実習ヲナス」とあるように、同校を卒業後、主婦になるべく女子学生に花嫁教育を施していたのであろうか。外出・門限・金銭物品についての項目から厳格な寄宿舎生活であったことは想像できる。名古屋高等女学校の寄宿舎については、1924(大正13)年に「新愛知」紙上に発表された。以下にその記事を見てみたい¹²⁾。

寄宿舎をめぐりて【三】

校長一家の家族として 温かみと親しみとに富める名古屋高女の寄宿舎

名古屋高等女学校は温かみのある女学校だ。ソレは何処の学校にもある事に違ひなからふけれど殊にココはソレが多分に流れて居る。家族的な温かみ・・・ソレは斯ふした集団に必要なことであるが求めて却々得られないものである。斯様な学校に付属せる寄宿舎だから云ふまでもなく其集団空気は他校に見出し難い家庭味がある・・・・舎には現在十人ほど居る。ソノ生活は全く姉妹生活であり家族生活である。家族員の統一は越原先生夫妻が、司つて居る。別に業々しく人事相談なんて看板は出ていないけれど心の質問にも応じコレらには親切に『燈火』

をつけてやる

「新愛知」記者の談によると、名古屋高等女学校寄宿舎は「校長一家の家族として温かみと親しみとに富める」ものであり、そこで生活する女子学生には「家族的な温かみ」を感じることでできるものであったと報じている。また「姉妹生活であり家族生活である」寄宿舎で学生の「心の質問にも応じ」ながら、「親切に『燈火』をつけてやる」工夫があったとも伝えている。校訓「親切」という言葉が出ているように、寮生活を通し、寄宿学生らの「親切」心を形成していくことに努めた。

それまで教師と舎監の兼職を担った春子であったが夫越原和が罹病により、学校経営が継続できなくなった。これを機に夫に代わり春子が校長に就任した。就任演説において春子は次のように述べている¹³⁾。

今度前校長に代わつて、至らぬながら、将来主婦となり母となつてその天職を全うしなければならない尊い女子の教育をあずかることになりましたが、職責の重大さを今更のように深く感じます。ただいまは四百五十名の生徒をあずかつておりますが行く行くは三百名くらいの生徒に、最も家庭的な温かい教育を施したいと存じます。私立学校は、設備においては公立のようにいつておりませんが、そのかわり精神的な面を十分に施してまいります

校長となって春子はさらに「将来主婦となり母となつてその天職を全うしなければならない尊い女子の教育」に力を入れ、「家庭的な温かい教育」をめざそうとした。校訓「親切」心の形成についても女子学生に対する良妻賢母教育の一環として行われたのである。

2. 名古屋女学校から名古屋高等女学校へ

大正期中頃に出された「高等女学校令」により、わが国の高等女学校の数、飛躍的に増加した。これに伴い高等女学校に志願者、入学者ともに大きく膨れあがった。名古屋女学校も1921（大正10）年にこれまでの学則を改正する方針を固めた。また授業料の増額と学科の修業年限・教育課程の変更にも着手した。学則の改正理由としては「家政科ハ従来志望者極メテ少ク、本年ノ如キハ一人モナキヲ以テ今般之ヲ廃シ、裁縫科ニ国語算術ヲ加ヘ且修業年限ヲニケ年トシ、従来ヨリ一層優良ナルモノ養成セントスルニ依ル」というものであり、実科中心の高等女学校に移行するようになった¹⁴⁾。

1922（大正11）年4月に名古屋女学校は、「名古屋高等女学校」（5年制）に昇格をはたした。多くの女子学生を抱えることになった春子は、ますます良妻賢母の教育に力を注いだ。春子は、さらに女子教育を実践するかたわら、自らの教育の考え学校についての思いを主張していくことになった。

Ⅳ. 春子における「私立学校観」と女子教育への意見

1. 私立学校における地位の向上と教育の機会均等の主張

校長を務めていた春子ではあるが、教育に関する内容を昭和初期ごろより、各地を講演したり、新聞等に自ら主張した¹⁵⁾。

入学試験撤廃問題の如きは容易に解決できるか如何

一体名古屋においては私立学校を軽く見過ぎる傾向があつて『私の子供は成績が悪いので私立に入れました』と平気で言う人があります。なるほど私立は官公立に比べて設備は悪いでしょうが、教育内容が劣っているという証拠がどこにありますか。官公立女学校を出た者が私立を出た者よりも優れているということは、何

を標準として申すのでしょうか。すべての人々がこの迷信を捨てなければ、完全な国民教育を望めません

「名古屋においては私立学校を軽く見過ぎる傾向がある」地元の私立女子学校に身を置く春子は、私立学校への偏見・差別は聞くに堪えなかったものと推察される。『私の子供は成績が悪いので私立に入れました』等という言葉聞いたときには一層その思いを深めたのであろう。公立学校よりも様々な面で悪条件であることで、偏見や差別を説くことは無意味であり、「完全な国民教育を望む」ためにも、今こそ私立学校の存在を見直す必要があろうと春子は提言している。

また春子は、私立学校の貢献について、次のように講演している¹⁶⁾。

私立学校の大なる貢献

昨年末の愛知県会で、樋口議員から、官公立校も私立学校同様に自給自足を促さなければならない。官公立校のみに年々多くの国費を注ぎ特別扱いしているのは、教育の機会均等の観点からして遺憾であるという質問がありました。爾来今さらのように各方面で話題にのぼっておりますが、これは当然すぎるほど当然のことでございます。現在わが国の学生数は一千余万人の多数にのぼり、官公立校の場合は小学校で一人あたり二十四、五円から大学生では一人あたり千三百円という教育費が分配されておりますのに比べて、私立学校は全く自給自足で教育界に貢献しております。つまり、生徒中のある者は公費の殊遇に浴し、ある者は疎外されているわけです。生徒の父兄には一様に課税されているわけですから、この殊遇に浴さない子女を持つ家庭では、教育費の二重負担ということになっていることになります。

例えば、中等学校以上は全部私立学校として、国が各校に補助金を与えるか、さもないれば教育費は国が全部負担するというふうにしない限り、教育の機会均等は単に文字だけに過ぎません。このように極端なことでなくとも、私立学校の発達のためにどしどし補助金を与えたならば、最善とはゆかぬまでも、教育の機会均等実現に近づくのではないのでしょうか。公立校の学生のみが全部優れて、私立校の学生は劣っているなどと言う人は、おそらく現代の日本にはありますまい。ですから、官立至上、悪く言えば官尊民卑の封建思想めいた囚われの観念から私学を見ることは、一考を要すると思います。私立学校を徒に讃美するととられては困りますが、私は私立学校に対する旧に観念を改めることの重要性を痛感しているのです

「私立学校の発達のためにどしどし補助金を与えたならば、最善とはゆかぬまでも、教育の機会均等実現に近づく」ことを期待しながら、私立学校への差別については、「一考を要する」ものであると、公立学校とは別個に存在する私立学校の地位を明確にしようとする意図が読み取れる。

また春子は、古くからの知己であった政治家であり当時、衆議院議員であった尾崎行雄を同校に招聘し、講演会を開催している。以下の資料は、当時の同校教員牧信行、木村きみ子が速記・要約したものである¹⁷⁾。

最も大切な物

女性には参政権がない。言い換えれば、女性は命と財産を持っていないということになる。女性も知識を進めて参政権を持ち、男女同権とすべきである。命と財産とは自分のものという認識を一人一人がしっかりと持たなくてはならない。学問の根本もここにある。あなた方は、

命について十二分に考えて勉強をつづけていた
だきたい

「憲政の神様」と称された尾崎は講演会において、「女性も知識を進めて参政権をもち、男女同権とすべき」と発言し、同校の女子学生に強く勧めている。「命と財産を持っていない」女性から脱却することを願い、そのために「十二分に考えて勉強をつづけ」ることを伝えている。

婦人の参政権に関連した講演について、1929（昭和4）年1月25日の地元新聞紙「新愛知」において、次のように述べている¹⁸⁾。

婦人公民権の問題を私はこう見る

人類の半分を占める婦人を除外しての選挙が果たして完全なものでしょうか。社会は男女協力によって成り立つもので、ちょうど車の両輪の如きものではありません以上、婦人を除外しての民衆政治は合理的とは考えられませんか（中略）国家社会の小さなものは申すまでもなく家庭であります。その家庭を健全に保護するものは婦人であります。健全な国家社会を要求すればいきおい健全な家庭を要求しなければなりません。よってその健全な家庭の保護者であります婦人を除外しての政治は、どう考えてみても不合理です（中略）国民の日常生活から離れての政治はなく、国家は我々国民のものであります以上、政治と家庭、政治と婦人を切り離すことは絶対にできませんでしょう。さように見ますれば、婦人を除外して男子のみの政権占有は到底完全な政治とは思われませんか、婦人として公民としての自由な発言権を与え、その力と経験などを広く一般社会に応用して、人類の福祉を増進することは、たしかに国運進展の上に重大なことと思われま（中略）太陽である男性との協力併存によって社会発展

と平和に寄与し得る女性の育成であります

女性の地位向上の考えを主張した春子は、「国家社会の小さなものは申すまでもなく家庭であります。その家庭を健全に保護するものは婦人であります。健全な国家社会を要求すればいきおい健全な家庭を要求しなければなりません。よってその健全な家庭の保護者であります婦人を除外しての政治は、どう考えてみても不合理です」と「婦人を除外しての政治」の「不合理性」を説いている。「婦人として公民としての自由な発言権を与え、その力と経験などを広く一般社会に応用して、人類の福祉を増進することは、たしかに国運進展の上に重大なことと思われます」と述べるように、婦人公民権の付与の正当性を協調した発言であった。戦後である1946（昭和21）年になり、春子は61歳にして衆議院議員に初当選し、他の39名にものぼる女性議員とともに壇上に立ち、女性の地位向上や公民権獲得を声高に強調し訴えたことにつながることになる。また「太陽である男性との協力併存によって社会発展と平和に寄与し得る女性の育成であります」という彼女の発言は、かつて平塚雷鳥（らいてう）等が中心となった「青鞥運動」の思想などに何かしらの影響を受けたものであったのかもしれない。

V. おわりに

春子は、幼少期から教員の道を志した。しかしながら家計の事情によりなかなかその職業に就くことはできなかった。刻苦勉励であった春子に従兄弟であった内木玉枝が手を差し伸べた。内木の薦めのも

と、中京裁縫女学校にて教鞭をとることになった。裁縫女学校時代より春子は、内木よりさまざまな教育者としての指導を受けながら、教員として成長を遂げるようになった。

在職時には、婦人問題に関心を持った教育者小林清作設立の愛知淑徳女学校に内木とともに教員として赴任し、女子教育に尽力した。「良妻賢母」としての女性を育成しようとする考えは、夫となる越原和とともに創設することになる名古屋女学校時代にも継承された。

名古屋女学校での春子は、寄宿舎舎監としては、学生に対し「親切」心の形成に力を注ぎ、校長に就任してからは、「親切」心を「校訓」として掲げ、女子教育の中心思想に据えた。名古屋高等女学校に昇格してからも春子の女子教育実践は、「良妻賢母」を備えた学生を育てることに力を入れた。教育実践の他にも講演活動・論文執筆等にも心血を注ぎ、私立学校の地位向上や女性の地位向上についても主唱し、教育の機会不均等の是正にも尽力した。春子が描いていた「新しい女性」とは、平塚雷鳥らが唱える「新しい女性」の考え方と共鳴するところもあったようにも推測できるが、知識を身につけた「婦人」としての女性の地位の向上をめざす春子の考えが、「新しい女性」観といえるもののかについては、今後具体的に越原の「女性観」を他資料をもとに深く慎重に検討しなくてはならないであろう。また第二次世界大戦後、「日本国憲法」・「教育基本法」の制定に春子が、どのような形で関わり、成果をもたらしたのかについても今後の課題としたい。

註

- 1) 先行研究には、結城陸郎（2000）愛知県近代女子教育史、愛知県郷土資料刊行会、175－189や、芳賀登・一番ヶ瀬康子監修（1993）日本女性人名辞典、日本図書センター、443、大石慎三郎監修（2006）新修名古屋市史 本文編第6巻、721などに紹介はされているものの、教育内容・実態の考察には至っていない観がある。
- 2) 越原はまた、「名古屋帯」の創始者としても有名である。帯の発明についての詳細は、南部弘（1995）もえのぼ

る－越原春子伝－、越原学園名古屋女子大学、50を参照されたい。

3) 越原学園名古屋女子大学編 (1995) 文字の世界と近代教育、名古屋越原学園、3-6

4) 越原一郎編 (1989) 越原春子日誌 美濃少女、名古屋女子大学、5

なお従兄弟の内木玉枝については、学校法人中京女子大学100年史編纂委員会編 (2005) 学校法人中京女子大学100年史、中京女子大学等に詳しい。

5) 春子は生涯において数々の講演活動を行っている。1917年の岐阜県今渡町で開催の「今渡町婦人会」では「女性は単に主婦として家庭内にのみ閉じこもっているべきではない (中略) 多くの人と接することによって視野を広げることが大切である」と述べ、前掲南部書144、また「家庭や社会にて活躍する存在であり、尊重されるべき存在」であるとしている。さらに「中部日本婦人連盟」の創立発会式 (1935年12月) では「一、婦人の社会的地位の向上を期す 二、家庭生活の合理化を期す 三、女子教育機関の拡充を期す」の三項目を掲げている (南部書、158)。

6) 愛知淑徳大学編 (1995) 愛知淑徳大学20年誌 大学開学二十周年記念、15

なお、「愛知淑徳大学」のホームページには創設者小林について、次のように紹介がなされている。

「愛知淑徳高等女学校は、県下で最初の私立高等女学校として創設されたが、女子に対する当時の時代風潮と異なる主張と目的を掲げて創立したところに私学の意義と特色があった。学園の創設者小林清作先生は、温良貞淑が女子の美德とされていた時代に、『温良貞淑が女子の唯一の美德と思わぬ。自覚したる女子は一個の人間であらねばならぬ』と主張し、『10年先、20年先に役立つ人材の育成』を教育目標に掲げたのである (中略) 英語や理科を必須科目にしたり (中略) 制服を洋装にし、修学旅行をいち早く取り入れるなど、時代を先取りした教育に実践されている。そしてここにこそ貞淑な良妻賢母の育成を目指した当時の女学校教育とは一線が画されていた。小林清作先生は、『10年先、20年先に役立つ人材の育成』を教育方針に掲げる一方、生徒には『淑徳魂』を説いた。『淑徳魂』とは陰徳の精神と逆境に屈せずに頑張ることである。やがてそれは『謙譲優雅』、『質実剛健』の校訓となり、愛知淑徳学園の伝統精神となって、現在も脈々と流れている (<http://www.aasa.ac.jp/guidance/history.html>)

7) 機関誌 淑徳第1号、愛知淑徳大学

8) 前掲、南部書32-33

9) 同上、35-37

10) 同上、79

11) 同上、80

12) 同上

13) 同上、81

14) 同上、92-93

15) 同上、101-102

16) 同上、112-114

17) 同上、201-202

18) 同上、203-204

※なお、本稿は2006年11月26日に開催された九州教育学会第58回大会 (於長崎大学教育学部) において自由研究発表したものを一部加筆および修正したものである。